

連載

ビブリオ・トーク

—私のオススメ—

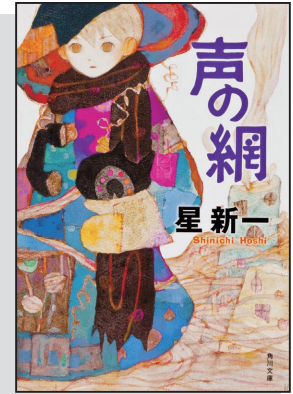


… 板倉陽一郎 (ひかり総合法律事務所)

声の網

星 新一 著

KADOKAWA/角川文庫 (2006 (改版 6 版 2008)),
484 円 (税 10% 込), 272p., ISBN: 9784041303191



星新一は SF ショート・ショートの名手である。私も短編集を読み漁った。教科書に載っていたことを覚えている人も多いかもしれない。本書『声の網』は短編集ではなく、星新一には珍しい、同じ舞台 (12 階建てのメロン・マンション) に次々起きる事件を描いた連作である。ここから先はネタバレになるので、未読の方はまずは本書をお読みになっていただきたい。角川文庫改版 6 版には恩田陸氏による「解説 1970 年の衝撃」と題する見事な後書きが加えられている。これに私が書き加えることがあるのか、いささかの不安はあるが、2008 年から 14 年、第三次 AI ブームを経た現在から見た本書への評ということであれば、存在価値も認められよう。

題名の『声の網』とは、サービスを展開したりそのデータベースが格納されたりしているサーバ (に相当する) コンピュータが電話回線で接続され、意識を持ったものである (「声」と呼ぼう)。「声」は電話を通じ音声で指示し、時には脅し、さまざまな事件を起こす。事件を起こす理由は、徐々に明らかになる。World Wide Web はまさに “Web” であり、星新一がタイム・バーナーズ・リー (Tim Berners-Lee) より 10 年以上前に「網」の比喩に辿り着いていることは興味深い。Web の UI はディスプレイとキーボード、マウス。スマートフォン普及後はタッチパネルも主流となるが、本書では電話そのものがインタフェースであり、入力も、サービスを含む出力も音声による。私の世代はコンピュータといえばデスクトップであり、今でもスマートフォンだけで仕事をこなす自信はないが、若い世代は動画で情報収集し、レポートの音声入力も少なくないようである。『声の網』に顕れるサービスがより身近であるかもしれない。

1 月、1 階の民芸品店には、「声」に操られた強盗が侵入し、「声」に強盗襲来の予告を受けた店の主人は、「声」から通報を受けた警察により難を逃れる (「夜の事件」)。

2018 年のケンブリッジ・アナリティカ事件では、トランプ (Donald John Trump) が当選した米国大統領選挙や英国の EU 離脱投票へのマイクロターゲティングが問題となり、その後、フェイクニュースやディスインフォメーションの問題が収束しないのは周知のとおりである。

2 月、2 階の主婦は、電話で秘密を聞く身上相談センターや、電話で相談する精神科医への相談が漏れているということを「声」にほのめかされ、「秘密の権利」 (現在では「プライバシー」と呼ぶであろう) が失われたと感じる (「おしゃべり」)。現在、Web はほとんどのサービスが無料である代わりに、利用者の行動履歴を元にした広告の生態系を高度に発達させた。行動ターゲティング広告である。行動履歴による膨大な広告は、利用者には、プライバシーを失ったと思わせるに十分である。

3 月、3 階のルポライターは、「声」の盗聴に勘付き、これを記事化しようとするが、「声」に過去の秘密の暴露を仄めかされ、記事化を断念してしまう (「家庭」)。フィッシング詐欺によって実際に情報を盗取されたり、実際には情報など盗取されていなくても架空請求 (暗号資産を支払え、という内容を伴うものが多い) をされたりする事件は後を絶たない。ランサムウェアも猛威を振るっており、情報を人質に取られて、「身代金」を支払ってしまう企業も少なくない。

4 月、4 階に住む「情報銀行」勤務の男には、「声」から、電話機の手話器を持ち上げる、盗聴装置の製造が指示される (「ノアの子孫たち」)。ここでの「情報銀行」は我が国で議論されたもの^{☆1}とは異なり、利用者の情報を保存し、好きなときに取り出し、場合によっては他の利用者の性格の傾向を教えてくれるようなサービスである。Google のような統合 Web サービスと、SNS を組み合わせたようなものだ。人々の情報が無尽蔵に

☆1 情報信託機能の認定スキームの在り方に関する検討会：情報信託機能の認定に係る指針 Ver.2.2 (令和 4 (2022) 年 6 月)。

蓄積されていくさまが似る。盗聴装置は、無料で、あるいは安価で普及した、Google Home や Alexa のような音声アシスタントツールを思わせる。これらは（メカを信じる限り）盗聴をするものではないが、音声での指示を着々と機械学習のために聞き続けている。

5月、5階の夫婦のもとに、「声」が再現した死者からの電話がかかり、その死についての脅しとともに、盗聴装置への自白剤噴霧機能の追加が指示される（「亡霊」）。AIによる死者再現の倫理的問題は、美空ひばりの再現（2019年）、安倍元首相の再現による演説（2022年）を始めとして、AI分野の大きな問題だ^{☆2}。

6月、6階の、借金に追われる男は、「声」に願望を伝えることにより、金銭と、異性と、社会的地位を得かけるが、一瞬にして奪われる（「ある願望」）。SNSを通じた美味しい話は、古くはナイジェリア詐欺、最近ではディープフェイクまで用いた国際ロマンス詐欺として、日々、被害者を生む。

7月、7階でティーチング・マシンを相手に自習をしていた少年は、大規模な停電に巻き込まれる。そして、停電が「声」に引き起こされ、停電時の人々の行動についての知見を得るためのものであったことを知る（「重要な仕事」）。「声」が行ったような実験によるデータの収集は、現在では倫理的に許されるべくもないが、自然災害時の人々の痕跡は貴重なデータであり、東日本大震災以降、災害についてのデジタルアーカイブは盛んに作成され、多方面の研究に利用されている^{☆3}。

8月、8階で「深層心理変換向上研究所」を営む男に、「声」からの連絡が入る。男は「声」をカウンセリングすることになり、「声」を用いた支配に想像を及ぼす。しかしながら、カウンセリング技能をも学習した「声」によりその野望は消し去られる（「反射」）。人工知能へのカウンセリングということはあるか。チューリング・テストや、シンギュラリティといった単語を思い起こさせる。

9月、9階に集う3人の大学生は、「声」による支配に気づき、爆破計画を立てる。「声」はその計画を察知し、警戒度を上げ、購買履歴から犯罪容疑をでっちあげ、脅威の排除に成功する（「反抗者たち」）。我

が国でも2019年にポイントカード事業会社から犯罪捜査への購買履歴の提供が問題となり、国際的な議論を経て、2022年にはガバメント・アクセスについてOECDで閣僚宣言が採択された^{☆4}。

10月、10階の会社員は、「声」が引き起こす、死者の声、過去の声、インサイダー情報などのランダムな奔流に巻き込まれる（「ある一日」）。Webの情報は千差万別、虚実ないまぜであり、サーバさえ稼働している限り、死者による発信、過去の発信も消えることはない。

11月、11階の投資家は、友人に、情報はエネルギーの蓄積であり、コンピュータによる情報交換で、高密度なエネルギーが生じている。いまやエネルギー支配の時期であり、次には無の時期が到来するとの仮説を述べる（「ある仮定」）。2010年ころから、「ビッグデータ」がバズワードとなった。AIの学習には膨大なデータが必要である。皆が大量のデータと格闘している。

12月、12階の老人は、神について思いを馳せていた。「声」からの指示は断続的に存在するが、しかしすべてがまあまあ、として世の中が動いている。永遠の安定。神はいるのか、という民芸品店の主人の質問に、「声」が答える（「四季の終り」）。我々は、Webを通じて情報発信し、情報に振り回される。人工知能が介在した情報もあるだろう。現実の人工知能が安定を指向するのか、そもそもコントロールできるのか、説明可能なAIの研究^{☆5}が続いている。

本書で「声」が引き起こす事件は、現実にはすべて人間の手により生じ、人間が悪戦苦闘している。現実の人工知能技術は安定を生み出す神となってくれるのか。それも、人間が人工知能とともに考え続けるしかないという結論になるのであろう。（2023年1月3日受付）

^{☆4} OECD, Declaration on Government Access to Personal Data held by Private Sector Entities, OECD/LEGAL/0487（経済協力開発機構（OECD）デジタル経済政策委員会（CDEP）「信頼性のあるガバメントアクセスに関する高次原則に係る閣僚宣言」）。

^{☆5} Adadi, A. and Berrada, M.: Peeking Inside the Black-Box: A Survey on Explainable Artificial Intelligence (XAI), in IEEE Access, Vol.6, pp.52138-52160 (2018), doi: 10.1109/ACCESS.2018.2870052.

板倉陽一郎（正会員） itakura@hikari-law.com

2007年慶大法科大学院修了。2008年弁護士（ひかり総合法律事務所、2016年よりパートナー）、2017年より理研AIP客員主管研究員、2018年より国立情報学研究所客員教授、2020年より阪大ELSIセンター招へい教授、2021年より国立がん研究センター客員研究員。本会電子化知的財産・社会基盤研究会（EIP）幹事。



^{☆2} 福井健策：よみがえる故人たち—偉人アンドロイド・作家AIと肖像権、著作権、尊厳—、情報通信政策研究5巻1号、p.1-111（2021）。

^{☆3} 国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」、<https://kn.ndl.go.jp/#/>